

2021年4月23日(金)

老球の細道606号

2020東京五輪は開催されるのか？

会津バスケットボール協会 室井 富仁

昨年延期された2020東京五輪(第32回)は開催まで100日を切った。今年は絶対に開催すると断言していたIOC、大会組織委員会や東京都、日本政府だったが、ここに来てまたもや新型コロナの感染状況が悪化してきた。そして開催の切り札として期待されていたワクチン接種の進捗状況も思わしくない。ちなみに65歳以上の私にはいまだにワクチン接種申し込みの連絡は届いていない。安全、安心の前提条件が崩れ去ってきた。

そんな状況の中で、海外からの観客は無観客が決定し、国内もどうするか5月中に決めるようである。政治家の大物議員もこれ以上コロナの状況が悪化すれば開催中止もやむを得ないと言った。水泳の池江選手の大活躍で、なんとか彼女を五輪に出場させたいという世論の盛り上がりも出てきたが、果たしてこれからどうなるのか毎日目が離せない私である。

そもそも五輪の開催決定権はIOCにあるようで、開催都市が自らギブアップした場合は多額の賠償金を東京都が支払わなければならない。IOCが中止を言い出せばIOC自身が賠償金を払う。そのためにどちらも先に「イチ抜けた!」は言えない状況にあるようである。

長い五輪の歴史で中止になったのは過去に3回しかない。1916年第6回ベルリン大会、1944年第12回東京大会、そして1948年第13回ロンドン大会である。いずれも第1次世界大戦と第2次世界大戦の戦争が中止の理由であった。しかし、開催都市が辞退したのは第12回東京五輪のみである。今回東京が辞退すれば2回目の辞退となる。

第12回東京五輪は「幻の東京大会」と五輪の歴史に印象強く残っている。開催年1944年がちょうど紀元2600年にあたり、それを祝賀する国家祭典とアジア初の五輪という名目で東京に招致した。ヘルシンキと猛烈な誘致合戦をしたが、満州事変や国際連盟脱退で世界の趨勢は東京開催に反対が多かった。時のIOC会長の「政治とスポーツは別である」という発言と後に同盟国になるドイツのヒットラーの後押しで東京招致が実現したという。

しかし、日中戦争の泥沼化で、日本軍部は東京五輪に反対するようになった。五輪にお金をかけるより戦艦にお金を、そして五輪でお祭り騒ぎは戦時下においては邪魔であるという理由から、あっけなく1937年に日本からIOCへ中止を伝え、幻の五輪となった。

今回もまだ開催の是非は混沌としているが、もし中止になったら色々な面で影響を受けるのは明らかである。特に経済面での影響は図りしえない。また、復興五輪を大義にした日本人全体の喪失感、五輪選手の喪失感も想像を絶するものがあるだろう。そして、今後の五輪自体の存在意義も問われることにもなるだろう。

新たに大会組織委員会に加わったマラソンの高橋尚子さんは、「9回ツアーアウトでも最後まであきらめないのがアスリート」とコメントしている。世界、日本のリーダーがこのような状況の時にどのような決断を下すのか、コーチの仕事にも関係することなので、リーダーの真骨頂をしっかりと学習したいと思う今日この頃である。